
アンノウン・エンジェル ~紅ハ蒼ヨリ赤シ~

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンノウン・エンジェル～紅ハ蒼ヨリ赤シ～

【Zコード】

Z0299E

【作者名】

雨月

【あらすじ】

人生に落とし穴はつき物…………そして、その前には必ず罠が！－これは罠にはまつた青年（17歳）が行き着く果てに見るものをおつていく？お話を

プロローグ兼第一話 蒼疾専用トラップ（前書き）

さて、はじめての方もはじめてではない方もこんにちわ！作者の雨月ですー！この作品は…………え？こいつのはあとがきにやるものだつて？！」「ほん…………失礼しましたー！

プロローグ兼第一話 蒼疾専用トラップ

プロローグ兼第一話

「はあ…………はあ…………」

漆黒の闇の中を少年が走っている。

「…………はあ…………」

いや、もう十七歳なので青年だらう…………とおりあえず、その青年が疾駆する。本日、彼の妹の誕生日で…………わがままながらも慕つてくれているので彼は妹のために誕生日プレゼントを買ってこようとしたのだ。

「しつかしまあ、僕も馬鹿だよな…………家に財布忘れるなんて

青年…………

天道時蒼疾

はそいつて暗闇の中を再び失踪するので

あつたが…………

「ん?」「

彼が失速したのはわき道にちらりと見えたものだった。

完璧に足取りが止まり、急いでいるのにもと来た道を戻ってしまふ。暗い道明かりの外灯に照らされていたもの…………それを確認するためには少年は戻つたのだった。

「こ、これは…………」

道端に落ちていたもの、それは…………十八歳以下はお断りのBO O Kだったのだ! 青年をいざなうかのように年上のお姉さんが流し目を彼に送っている。

「ぐ…………今、鞄持つてないからな…………もって帰つたらばれちやうかも…………」

首を振る少年だったが、お姉さんの流し目攻撃は予想以上の攻撃力で彼の頭の中から怒っている顔の妹が押し出されてしまった。そして、青年はよくある葛藤に襲われ、もだえる。苦しみの末に彼が下した決断は…………

「やつぱ、もつたひないよな…………リサイクルリサイクル」
ちなみに、彼が行つた行為は厳密に言うとリサイクルではなくリ
ユース（再使用）であろう。

しかし、まさかこの本が後に彼の人生を予想以上に壊してしまつ
とは誰も…………それこそ、エッチな本の表紙を飾つていたお姉さん
…………知らなかつただろう。

エッチな本に手をかけたその少年は今になつてよつやく『叛がつく。
「ん？」

自分を見ていたその存在に…………

「うわああああああああ…………」「

そして、気がついたときには青年…………蒼疾は既に段ボール箱の
中に押し込まれてあり、彼の叫び声など誰の耳にも届いていなかつ
た…………いや、聞いていたとしてもエッチな本の表紙のお姉さんぐ
らいだるわ…………

「ふ、うまく言つたな…………」

青年をダンボールに押し込んだ人物はエッチな本を手に持ち、そ
れをダンボールの上に置き、その場から消えてしまつた。そして、
蒼疾は次の日から行方不明となつた。

プロローグ兼第一話 蒼疾専用トラップ（後書き）

え～では、仕切りなおしでいんにちわー作者の雨月です！さて、第一話どうだったでしょうか？そして、え～と、もう一年以上前にこの小説でここにデビューしましたが……まあ、面白かったのならこれ幸いってところでしょう。当時のことを知っている方、そして読んだことがある方など……教えてくれると嬉しいなあと思っています。勿論、今回は新作として発表させていただきます！

第一話 ハンジョイ！フライ！

第二話

「あいたた…………え？」

ダンボールからなんとか抜け出した蒼疾は気がつけば自分が裁判所の証言台に…………いや、被告側に座っていることにはじめて気がついた。

がやがやとした声が聞こえてきており、それに対しても嫌気が差してきただの、裁判席に座っている人物は木槌を打ち鳴らす。

「…………え、静粛に！これより、判決を言い渡します！」

裁判長は女性のようで、彼女と同じ高さの席に六人が綺麗に座っているようだ。中央の裁判長は背中に赤い…………いや、紅い翼を生やしており、他の六人は白い翼でどの人たちも個性あふれる仮面をつけて静かに法廷を見下ろしていた。

「…………天道時蒼疾を牢屋に放り込むことを決定します」

裁判長は嬉しそうにそう告げる。そして、なんだか軽いノリで決められてしまったことに憤ることも出来ずにせつかくダンボールから出た蒼疾の脇には背中から白い翼を生やした警備員一人組みがやつてくる。あつという間に脇を押さえられると彼らは蒼疾を持つてどこかに連れて行こうとした。

「ま、まつてよ！僕は何で！何で…………」

何もわからずに彼は赤いじゅうたんの上を宙に浮いたまま連れて行かれる…………とおもつたのだが、いきなり一つの影が彼らの前に立ちふさがった。

「ぐわっ！」
「がはっ！」

その影はあつという間に紫色の棒のようなもので一人の警備員を即座に殴打。彼らは急所に攻撃を加えられたことでその場に倒れてしまつたのだった。

「まったく、いつも」こは力で解決しようとする……だから、私は嫌いなのだ」

頭のよさそうな印象を受ける男がそつまく。そして、書類にペンをどこからか取り出すと男は蒼疾へとその一つの道具を渡す。

「え？」

「ここから抜け出したいんだよね？ 空を飛ぶには翼が必要……今の君が使える方法は飛び降りて人間界に戻るぐらこさ。だから、この誓約書に悪いけど住所、名前、電話番号……ここ」の感想を書いてくれないか？」

絨毯の上で構わないからさと男は咳くと廊下の先のほうを見る。つられて蒼疾もそちらを見たのだが警備員が波となつて押し寄せてきたのだった。

「ひつ！」

「おつと、あわてないあわてない……君がその書類に記入している間、僕はここで彼らの相手をしてあげてるからさ……ゆつくり書いてくれたって構わないよ」

男はそういうとわーっ！…といいながら押し寄せてくる……と、防火シャッターらしきものが上から降りてきて警備員たちが蒼疾の前にやつてくることを阻んだのだった。

「これで大丈夫……書いたかい？」

まったく相手なんてしていない男はそんなことを後ろにいた蒼疾にたずねる。

「あの、ここ」の感想つて？」

「ああ、ここ」は天界の裁判所……君の素直な声を聞かせて欲しいんだ。まあ、受付のところにも感想を書くところがあるんだけどね」男のわかりにくい説明によるこの裁判所についての第一印象をそここの欄に書いておけばよいよつだ。蒼疾はとりあえず率直にその紙にペンを動かす。

『理解不能』

「だろうね」

男はそうやって笑うと蒼疾から紙とペンを返してもらうとこれまた近くの扉を開けた。扉には『危険！開放禁止！』と書かれているのだがお構いなしだった。

男は蒼疾の背中を強く押し、暗黒の暗闇に蒼疾をたつた一人で旅立たせたのであつた。勿論、蒼疾は叫び声を発しながらただ真つ暗の空間を一人で墮ちていつた。行き着く果てがどんなところであつても、彼はこの叫びを止められないだろう。

咳け！

な
何を?

叫び声をあげるだけの蒼疾に変化が起こつたのは男に落とされて
どのくらいたつた後だろうか？そんな声が聞こえてきたのだ。

「あ、紅き翼を持ちたい！」

蒼疾は言われたとおりにたたき咳く…………たたきにしては相当声が大きかつたのだが…………とりあえず、それは成功した。

塔の櫻

11

気がつけば自分の背中からは紅い翼が生えており、それが羽ばたくということはないのだがそのおかげで間違いなく落下がゆっくりとなっていた。

「雪ー?」
下にはよく見知った光景が広がっていたのだが

自分と共に地面へと向かっているものをその視界に捉えると今の季節が冬であるということをいまさら知った。どうやら、クリスマスが間近のようだつたのだが……蒼疾がエツチな本の眼にかかつたのは七月の初めぐらいだつたはずなのだ。

「…………あれから…………ええと、ハ、九、十、十一、十二…………五ヶ月もたつたのかな？」

そういうながらこの光景を人に見られたらまずそつだつたので蒼疾の町の近くにある鏑びれてしまつた町のほうへと向かつた。そこには不良たちがたまつてることが多々あるのだが、街の人たちよりは幾分ましのような気がしたのだ。

そちらのほうに行きたいと思えば自分もその方向にいけることに気がついた蒼疾は急いで「ゴーストタウンと化したその町へと向かつたのだった。

「…………五ヶ月なんかじやない！一年以上たつてる！」

寂れてしまつていた町にも勿論、コンビニなどがある。不良のたまり場となつていて、店員も不良だつたのだが蒼疾は気にせず大声を出した。

「…………」

ふらふらとしながら歩き出し、そんな茫然自失とした蒼疾を不良たちは見逃していなかつた。

「なあ、兄ちゃん！クリスマスプレゼント代が欲しいんだ！俺たちのサンタに鳴つてくれねえか？」

そんなことを不良たちが言つてくる……だが、蒼疾はそれを無視して歩を進める。

「おい！聞いてるのかよ！」

蒼疾に手をかけようとするが…………その前に、その手がつかまれ、不良が壁に叩きつけられる。

「ぐへつ……」

「え？」

別に蒼疾が手を出したわけではなく、他の誰かがその不良を吹き飛ばしたのだった。

「へえ、人間界で久しぶりに同種を見るな～っておもつたけど……どうかしたのかい？」

「え？」

再びそつまく蒼疾が声のしたほうに視線を送るとそこにいたのは

見た目が蒼疾よりも一歳ほど幼そうな女の子だった。

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

卷之三

不良たちがいつせいに女の子に襲い掛かる…………多勢に無勢だとおもつていた蒼疾だったが、その常識は吹き飛んでしまった。

「ハヤシ一せめて動きを止めやー」

参戦せずに後方で指令を出している不良が別の指令を出した。他の不良たちは言われたとおりにそれぞれが女の子の足や手に群がろうとしたのだが……

「無駄無駄無駄！」のあたしをとめたいのであれば……

少女は何か手にしており、それは紅く輝く。彼女が一閃しただけで向かってきた連中はすべて気絶してその場に倒れ付したのだった。勿論、後方の不良までも……

「…………ビデオカメラでとつて静止ボタンを押すことだね！」

第三話 不良と遊ぼう

第三話

他の不良と共に気絶してしまった蒼疾がよつやく気がついた。

「お、気がついたかい?」「

「おわっ!!」

女の子は蒼疾に馬乗りになつてている状態であり、何故か自分のシヤツのボタンを開けている途中だったのだ。

「な、何してるんですか!」

あわててやめさせようとするが彼女の手は止まらない。

「おつと、ちょっと怪我とかしてないか調べたりしてるんだよ~邪魔しないでくれ」

「怪我?」

「そう、あたしのあの技、食らつただろ?」

思い出ようと努力する…………そういえば、彼女が何か啖呵を切つたのを思い出しが詳しく述べない。

「さすがに同種にそんなことするのは気がひけるし、見たところ不良って柄でもない…………可愛い僕ちゃんって所だらうつておもつてね~」

細めでじーっと蒼疾の顔を見る。そんな経験が殆ど無い蒼疾は困つたような顔をして結局、最後は目をそらしたのだった。

「ま、どこか痛むのなら教えて欲しいんだけど?」

「え~と、大丈夫です」

「無理してないかい?」

「ええ、今のところは…………」

未だに馬乗りになつて抱きしめようと思えば抱きしめる範囲にいる彼女を意識しないように蒼疾は口を開く。

「ええっと、助けてくれてありがとうござります」

「い、いやいや、礼なんていいよ~あたしは別にあなたを助けよう

としたわけじゃないんだからやー…………とにかく、今前はなんてい
うんだい？」

女の子は興味深そうに蒼疾をじりくつと見てくる。

「ええと…………天道時蒼疾」

「蒼疾か…………」

「とりあえず、ありがとうございました！」

田の前にいるのだが頭を下げる間にしたのだが…………

「や、そういわれると照れるな…………」

田の前の女の子は礼を言わることに慣れていないようで、
顔を紅く染めていたのであつた。そして、妄想を破裂せしめる蒼
疾も顔を真つ赤に染めている。

「え、えーと、あなたの名前を教えてくれませんか？」

「え？ あ、あたしかい？ あたしの名前は…………風華さん…………岡野風
華」

「風華さんですか…………」

自分より年下のようだが話し方、落ち着いているその態度が蒼疾
よりも上っぽい感じを匂わせていた。

「風華さんはここで何をしているんですか？」

ちよつとぼろぼろのアパートのような部屋を蒼疾はきょろきょろ
と見回した。そして、自分がベッドの上にいることに気がつ
き、改めて顔を真つ赤に染める。

「ああ、じろつきみたいなことや…………不良を襲つては財布をくす
ねたりしてる…………ついでに、犯罪者となつちまつた連中は警察の
前に転がしてきてる」

「…………いいことをしているんですか？」

「そういうとこやそうな顔をする風華。

「いや、言つたら、じろつきみたいなことをしているつて…………
わざわざも言つたけど、蒼疾を助けたのは興味を抱いたから」「興味？」

蒼疾は自分の体を見渡す…………だが、別におかしいといふは…………

…いや、あつた。

「この、翼のことですか？」

「そう、それ」

不良のかたがたも『ういうものをつけていたのだが蒼疾はその中でもおかしい姿だつたのだろう。

「えへと、この翼のことを知つてているんですか？」

「まあね。蒼疾は知らないの？」

首を振る蒼疾に風華は成る程へと軽めに頷いた。

「あの、嘘だつて言つてくれても構わないから僕の話、聞いてもらえませんか？」

蒼疾は彼女にこれまであつた本当のこと話をした……ちなみに、蒼疾の話はダンボールに入れられたところから始まつた……話しが終わると、聞き手になつていた風化は彼に告げる。

「家、行つたのか？」

「え？」

「蒼疾の家だ……今頃やれ行方不明だ！やれ誘拐だ！とかになつてるんじゃないのか？急いで行つたほうがいい」

今まで気がつかなかつたことを風華に言われる。そういうえば……といったところだらうか？

「そ、そうですね……」

立ち上がろうとする蒼疾を風華が止める。

「……ところで、一つ聞きたいことがあるんだけど？」

「えへと、何ですか？」

「蒼疾君は何に釣られて天使につかまつたんですか？」

「……」

絶句するしかなかつた……きつと、今の自分の顔をカメラで取つたらさぞや面白い顔となつていることだらう。さらに言つなればいきなり敬語になつた風華の顔は非常ににやーつとしたものだつた。見たものすべてが損をしてしまつ……そんな顔だつた。

「ほ、僕を捕まえたのは天使だつたんですか!?」

「ねつと、話を替えよつとしない！」

逃げられない状況で体重をかか、

遂に坐木かい。さうに体重をかけ、向三で薫翁の顔を搔きだる。

そんないいあたしは男はがまねんさ

三に不一遂に三三十六種類精力万
才に重力万に會絶

それで少無いに正體の問題だNIII、

「ほらほら～ あたしの田をちやん

徐々に迫ってくるその可愛い顔に蒼疾の妄想は徐々に危ない方向

ノルマニヤソニゾ

「ハピーバースデー」を書いたカード

「國があたつちやいねす!」

「あたしはあんたみたいな外見の男の子好みだからだいじょーぶ！」

「が、外見で人を判断するのも

中興もよれにせそにて素直でしせめかしかあてたまんないわ！」

おの最高よー。と云ふてゐるが、ううん。

〔 〕

「アーリーは、アーリーがアーリーをアーリーでアーリーするアーリー」

「今のは!?

風華は扉を開けるとベッドでボーッとしていた蒼疾に「やりと笑う。

「鳴？」

四
甲

鶴にてあんな鳴き声するのか」と考へていた蒼疾の手を風華は掴む。

扉の先には廊下なんてなく、そのまま一階……。JのJが地上四階

だと今頃蒼疾は気づく…………へと一人は飛び降りる。勿論、なれない蒼疾は叫んだのだった。

「……………」

第四話 叫び声は奇声じゃないのかー

第四話

叫び声がした方向へ嬉々とした風華と死ぬような思い（飛び降り）をした蒼疾は疾走する。

「つと、間に合つた……蒼疾、奇声を発した子を助ける」「え？」

「無双じやああああ……田指せー最高コンボ！」

紅い剣のよくなものを振り回しながら不良たちを蹴散らしていく風華。その顔はとても嬉しそうだつた。

「え、えつと……」

基本的に言われたことをやつてしまつ蒼疾はまだ会つて間もないところに風華の言つたことを実行したのだった。

「や、僕の後ろに来て！」

「え？ お、お兄ちゃん！？」

そんなことを言われたよくな気がしたのだが、蒼疾は叫び声を発した女の子を後ろへとかばつ。

「こつちの男のほうが弱そりだぞー！」

「くつ……」

不良の半分ほどが蒼疾のまつに殺到していく。

「く、来るなら来てみろー！」

「足が震えてるぜー……くたばりなあーー！」

鉄パイプを振り上げ、不良は優越感に浸つていたのだが……

「くつ……」

「……覚悟するのはそつちのまつを……いやだねえーこんな、くだらない相手をするのは……覚悟、決めてくれよ？俺、手加減できないから……」

「あ？」

振り下ろされたはずの鉄パイプは男が握つてこるとこからすでに

に地に落ちていたのだった。

多勢に無勢なのが、例を例えるならばフル装備機会兵士に素手の人間たちが押し寄せているよつた感じだつただろう。その圧倒的な戦力は涙ものだつた。

「…………あれ？」

蒼疾も意識を取り戻し…………恥ずかしい話だが、蒼疾は氣を失つていたのだつた。

「蒼疾、助けた子は？」

不良の服をなれた調子で剥いでいきながらそんなことを尋ねくる風華。

「えつと…………その、すいません…………氣を失つていたみたいで……」

「…………氣を失つていた？あたしより嬌々として相手をボ「ボ」にしていた蒼疾がよくいうわね～…………ま、力に振り回されてるんだろうけどさ」

風華はくすねた財布をまとめて袋に入れると指を鳴らす。

「！？」

転がつていたはずの不良たちはすべて消えてしまったのだった。

「これは？」

「ちょっととしたマジック」

「どこに消えちゃつたんですか？」

「あれ？さつき言わなかつた？交番か警官がいるといひあ～すつきりした」と言つて再び蒼疾の近くに立つ。

「蒼疾、血、出てるわよ～」

「え？」

「ほら、ここ…………」

ハンカチでほっぺを拭つてもらい、その仕草がいやに脳に焼きついた蒼疾だつた。

「で、あの子はどこにいったのかな～…………おーい～もう君に危害

を加えるよつた悪い子達は始末してあげたから出てきても大丈夫だよ~

下心ありありな声を出しながらゴミ箱の中を探したりする。

「あり? いないな~」

「それはまあ…… そんなところにはいないとおもいます」

「蒼疾も早く探す! あんたがちゃんと見てなかつたから悪いの!」

「…………はい、わかりました」

上からものを言われるとこんな風になつてしまふ自分を叱責しながらも半ばあきらめた調子で蒼疾も搜索を開始したのだつた。

「いた?」

「いえ、いませんでした……あの子、大丈夫ですかね?」

「ま、大丈夫なんぢやない? ここから出て行つた可能性が大きいから

どうでもよきげにそんなことを呴いて彼女は蒼疾のほうを見る。

「で、どうするの?」

「どうするって?」

何がどうしたのだろうか? そうおもいながら蒼疾は考えた。

「あのねえ、自分の家に行きたいんじょ?」

「あ、そうでしたね…… けど、もう深夜ですしつつ……」

不良たちも寝静まつたのか(どつちかといふと一人にボコボコにされた後に警察署に連れて行かれたのが大きい) 静かになつてしまつた町の出入口で彼らは話し合つた。

「ま、邪魔になるわよね~………… 今日はあたしの家に止めてあげるわ…… さつきのところだけね。ベッドはあたしと共同。どう? 嬉しいわよね?」

「…………ええ」

何よ、その態度は? と笑いながら叩かれてこけそつになる蒼疾。

「えつと、お世話になりますね。風華さん」

「気にしない気にしない………… ま、天界の連中の話もしてあげた

いし、やつきのことも詳しく述べたいからね…………

「どうやら蒼疾の聞きたいことはお見通しらしく、ちょっとまじめな顔で蒼疾に告げる風華。

「…………風華さん」

感激の念にとらわれた蒼疾だったが、次の瞬間には彼女の顔がにやーっとした顔に変わっていた。

「勿論、この魅力的なあ・た・しのボディーもじかに教えてあげるわ」

「…………」

風華はそういうて体をくねらし、セクシーなポーズを蒼疾へと向ける…………だが、お世辞にもナイスバディーとは言ひがたいその体を見ることがなくアスファルトに咲いている花へとむける蒼疾。その表情はちょっと同情しているような感じだった。

「何よ、その物足りないって顔は!」

「え? い、いつてませんよ!」

思つただけです!といおうとしてあわてて口を閉じる蒼疾。そんな蒼疾を睨みつけていた風華が口を開く。

「まったく!失礼しちゃうわね~…………ま、今日は許してあげるわ。疲れだし」

そういうて蒼疾の腕を掴むとねぐらである先ほどの部屋へと向かつていったのだった。

「…………そ、そんな…………おにいちゃんがここにいるなんて…………」

そして、そんな二人のやり取りを見ていた一人の女の子が呆然と立ち尽くす。彼女はそのままこの町を出て行き、町は完璧な静寂をよづやく迎えることが出来たのだった。

「…………」

「ま、蒼疾が知りたいと思つていてることがほかにないのならあたしは眠らせてもらうわよ?」

ふわあ~と大口開けてあぐびを一発かますと隣の蒼疾を見る。

「…………ええ、ありがと「J」やこます」

若干暗い顔になってしまった蒼疾の頭をくしゃくしゃにして風華は笑う。

「ま、眠れないかもしけないけど、そのときはあたしの顔を見て和んでて？」

「ええ、すみません」

じゃ、おやすみ～と彼女は言つてすぐにいびきをかき始める。

「…………」

蒼疾も彼女の隣に寝転ぶと静かにまぶたを閉じた。先ほどまで聞いていた話が頭の中を駆け巡っていたのだが…………となりで静かに寝ている風華を見ていると馬鹿らしくなつてそのまま眠つてしまつたのだった。

第五話 夢、覚めぬ「ひむ

第五話

蒼疾は夢を見ている……

折れた鉄パイプは悲しく音を立てて動かなくなる。

「なんだ？お前？」

不良がぎょとして見る先には紅い光を放つ男が立っていた。

「俺か？俺は……お前に絶望を届けに来た天使だ……右手、右足……どこから折られたい？おつと、パイプを折ったのはデモンストレーションだ」

そういうて今度は指を鳴らす。すると、不良たちが持っていた武器がすべて折れてしまった。

「どうだ？スプーン曲げて使えなくするよりも面白いだろ？」

「やりと不敵に笑い、舌なめずりをする。

「お、お兄ちゃん？」

蒼疾は振り向き、別に感情のこもっていない顔をする。

「あん？お前、椿だったのか？おつと、お前の知っている兄貴は俺が氣絶させたからな」

「知ってる、お兄ちゃんは一重人格者だつてことを……」

「ああ、そうだったな……ま、そんなことはどうでもいいや……」

「邪魔だからひっこんどけ」

「う、うん……」

近くの「」箱に隠れたのを確認すると蒼疾は一步踏み出しそう。

「お？」

不良の目の前に立つており、一人の不良はその場に倒れ付した。

「……妹を可愛がってくれたおかげだ……カクゴジャタリナイ、イチヤカギリノアクムヲミセテヤル」

不敵に笑うと蒼疾は襲い掛かってきた相手たちを一撃のもとに倒

していく…………近くでは風華が踊るよつとして粗手を倒していく
ているが、それよりもすこかつた。

「ひいっ…………」

「…………ラスト、残念だったな～最後の奴はいたぶつて氣絶させて
やるぜ～まずは足をこじょぐつてやるわ」

繩でぐるぐるにされて動けなくなつた不良は靴を脱がされ、くす
ぐられたのだった。

「ぎや、ぎやはなはは…………」

「どうだ？ 苦しいだるひつ～苦しこよな～？ その苦しそうな顔、最高
だぜ～？」

嬉々とした表情で不良の足の裏をくすぐついている蒼疾…………だが、
すぐに相手は涙を流しながら氣絶してしまつた。

「つたく、面白くねえ奴だ…………おっと、そろそろあいつが意識を
回復するか…………」

「うわああああ…………」

絶叫しながら田を覚ます蒼疾。

「おっと、今お田覚めかい？ 相当うなされていたみたいだけど…………」

「…………」

「あ、風華を…………」

風華は何も纏つていなかつた。そういうのを見慣れていなかつた
(いや、本とかでは見たことがあるのだが) 蒼疾はあわてて田を瞑
る。

「す、すいませんでした～～～！」

「あ、ちよつと蒼疾！」

走り出した蒼疾はあわてて部屋を出よつとしたのだったが、

「う、うわああああああああ～～～！」

朝つぱらから彼は地上四階から飛び降りるハメとなつたのだった。

「…………アンノウン・ヒンジルって丈夫なんですね？」

怪我も何もしなかつた自分の体を触りながら手渡された朝食のトーストを口に入れる蒼疾。

「まあ、馬鹿みたいに強いわよ～それこそ、三人ぐらいいれば世界を征服できるレベルね～」

成る程、それならば不良が街単位で襲つてこようがいらっしゃと対処できるわけである。

トーストを塗りながら露出の多い服を着る。その体型から色氣を感じるというより元気のいい娘みたいな印象を受ける。

「え、えっと……もう一回どういったものか聞いて構いませんか？」

着替えをしている風華を極力見ないようにしてトーストを口に無理に頬張る蒼疾。その顔がちらりちらりと風香を見ていたりする。

「アンノウン・エンジェル…………もうめちゃくちゃ前に神様が天使と悪魔の争いを止めるために新たに作り出した存在ってことになつてるわ…………戦闘能力は計り知れず、戦うためだけつて言つたらおかしいから戦いが得意な天使ね。あ、だからと言つて自分から争いは起こさないのが多いわね…………あたしもそういう温厚な性格よ」

自ら不良どもをボコボコにしているのが温厚なのか？と思つたのだが蒼疾は話の腰を折るのをやめた。

「アンノウン・エンジェルがどういつた経緯で出来たかは知らないけど…………普通の天使がなれたりもするそうよ？まあ、これはあたしたちには関係ないけどさ…………」

ここでこの説明はおしまいって蒼疾にたずねる。

「大丈夫？復習できた？」

「え？ま、まあ…………」

本当のところは着替えをちら見していたのでぜんぜんなのだがその点は昨日はなしてくれていたときに完璧に覚えた…………というより、前から知つていた感覚だった。

「それで、次は天界のことだつたわね？」

「ええ、そつちは全然です」

どういったものかさっぱり理解できない。

「天界つてのは神界、天界、人間界、魔界、魔王界の五つの界の一つね? どこにあるのかわかんないんだけど、白いトイレに向かって天使が話しかけると扉が開くのよ? 逆もまたしかりね」

とても簡単に扉が開くというのがおかしいことだったのだが、なるほど、この方法ならば人間が迷い込んだり、天界に行つた人間がこちらには戻つてこれない。

「あたしが天界について知つてることはこの程度ね」

「……まあ、充分だとは思いますけどね」

そう言つて蒼疾は立ち上がる。

「家に向かうの?」

「ええ、まあ……短い間でしたが、お世話になりました」

下げた頭を上げると、座つていたはずの風香も立つっていた。

「……あたしもついていくわ」

「え?」

「……ちょっと、気がかりがあつてね」

さ、行くわよ? と彼女は言つときょとんとしている蒼疾の腕を掴むと風香だと本田一回目、蒼疾だつたら本田一回目の飛び降りを決行したのだった。

静かな家の前に立ち並ぶ二人……

「家、空き家になつてますね」

売りに出されている我が家を前にして愕然としている蒼疾。

「まあ、一年以上経つてるからね」

「……僕の感覚としては一日一日ですよ……」

まあ、そうねと彼女は呟いて携帯を取り出す。

「ふんふん、成る程……」

携帯でどこかにかけて話をしているようだった。隣では膝を突いて愕然としている蒼疾は何も考えることが出来なかつた。

「……さ、蒼疾……はいるよ」

「はいりつて？」

死んだような目をした蒼疾を無理やり立たせ、顔を掴む。

卷之三

よろしいと呴いて従えて家中へに入る。

第六話 THE END (前書き)

事情があつて今回で終わりになりました、すみません。

第六話 THE END

第六話

家中をあらかた見てまわった風華は未だに蒼疾を引き連れていたままだった。

「ふうん、なかなか広いわね？お風呂も一人ちょうど入れるサイズだわ」

「ええ、まあ……って、どうこいつ意味ですか？それに、もう、僕の家じゃありませんけど？」

悲しげに言う蒼疾に軽い調子で風華は答える。

「まあ、これからはあたしたちの家だわ」

「そうですね……」と蒼疾は呟いたが次の瞬間には風香の肩を掴む。

「あら？ あたしことにうとう振り返してくれた？ お姉さん、そんなに見られると困っちゃうわ」

「そ、そんな」とより……あたしたちの家ってどうこいつのことですか！」

詰め寄る蒼疾に風香はため息をつくよじこじして答える。

「……あのねえ、別にあなたの両親はその気になれば探せるわ。それより、家を失ったあんた、どうするの？ ダンボールで暮らす？ それもまた一つのお話があつて面白そうね？」

計画性のない突拍子の言葉が一番危なくて身を滅ぼしやすい要素なのよ！ とさういって返答を待つが、蒼疾はぼそぼそと呟くしかできない。

「う……それは……」

そんな言葉は聞きたくないとばかりに風華は一方的に告げる。

「とりあえず、この家を借りる！ そして、それからあなたの両親を探せばいいわ」

「で、でも僕お金持つてないし……」

再び外へとやつてくる風華と蒼疾。彼らの前に車が一台止まつて

家財道具一式を入れ始めたのだった。

「だ・か・ら！ あたしもここに住むのよ！ あたしがお金を出してあげる代わりに蒼疾は家事ね？ はい！ けつて～！」

そういうて空き家と書かれていた紙をはがし、家財道具を家の中に入れ始める白い人たちの一人が彼女に表札を渡す。

「どうぞ、お嬢様」

「お、お嬢様！？」

驚く蒼疾をさらりと無視して風華はお手伝いさんにすばやく答える。

「ん、ありがとう…… ああ、メイドを一人雇つておいて…… 新人、よろしくね」

「かしこまりました」

家財道具を入れ終えた白い服たちの人たちはあつと/or/う間に去つていったのだった。

「まあ、何も考えないでゆるりとたまには生活してみたら？」
ぽんぽんと蒼疾の肩を叩いてそんなことをいつ。蒼疾は首をかしげながらも風華のほうに向き直つて念を押すようにたずねる。

「…………いいんですか？」

「いいのいいの！ 気にしない気にしない！ 天使の施しは万人のためにあるのよ」

「口一コといった調子で蒼疾の肩をぱしばしと叩く。

「さあ、年越しの準備をしないとね？」

「…………そうでしたね」

今思えば既にクリスマスも終わつており、感覚は未だに夏なのだが季節ではもうそろそろでこの年も終わつてしまつ。

「さ、行くわよ」

「ど」「へ？」

「ショッピングよショッピング！」

蒼疾の腕を抱きしめるよつこして風華は歩き始める。

「あの男、絶対に尻にしかれてるわ」

街中、そんな声が蒼疾の耳に入つてくるが、彼の頭の中は腕に当たつているやわらかいものに意識がいつていてそれどころではなかつた。

「…………」

「何そんなにがちがちになつてるの？」

「だ、だつて…………その、嬉しいんだが、はずかしいんだが…………」

混乱する蒼疾に彼女は告げる。

「実はね～この話…………今日で終わりー」

「ま、まじっすかー？」

「うん、正確に言つと、次の行でエンドー」

（END）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0299e/>

アンノウン・エンジェル ~紅ハ蒼ヨリ赤シ~

2010年10月8日15時36分発行